新今昔物語

第42話

古堤街道を往く⑤
「諸福天満宮～江戸時代の面影が残る神社～」

前回小欄で紹介した勝福寺の東向かいに、諸福の氏神として古くから崇拝されてきた諸福天満宮があります。

当社が諸福の地に勧請（かんじょう）されてきたのは寛永20年（1644）のことで、拝殿と一体化した権現造（ごんげんづくり）といわれる様式の本殿は、市内では非常に珍しい桃山建築の建造物として大東市の指定文化財となっています。当社は古堤街道よりも低い土地にあり「神を見下ろす」格好になっていたため、昭和に入ってから盛土をして社殿が上げられたそうです。

江戸時代には産土（うぶすな）神社と呼ばれていましたが、明治5年（1872）に祭神・菅原道真にちなんで菅原神社と改められました。その後、平成の修復の際に、本殿に掲げられた「菅原神社」の扁額（へんがく）の板をめくると、「天満宮」の字が出現しました。これを記念して、平成11年（1999）1月1日に諸福天満宮と改称されました。

境内には、天和2年（1682）銘の石鳥居や、元禄3年（1690）銘の燈籠など、江戸時代の石造物が残っています。また、延享2年（1745）に奉納された燈籠には「河内国茨田郡諸福村伊勢講中」とあり、江戸時代中期に諸福に伊勢神宮の信仰集団が存在していたことが分かります。

境内の奥には末社の歯神社があります。歯痛によく効く「歯神さん」として地元の人々から親しまれています。

次回は古堤街道を東へ進みながら、街道から見える風景について紹介します。

（生涯学習課）

諸福天満宮社殿

末社・歯神社